

た話題提供者、指定問討論者の率直な意見の交換を中心に、保育の本質に立った保育者の役割について共通認識を深めるとともにあるべき保育者の姿について多くの示唆を得たいと願っている。(司会者 岸井勇雄)

保育者のあり方を考える

いかなる時代においても、人間としての基本的な生き方の教育は変わりがないように、幼児期における人間の育ちに必要な保育のあり様にも、時代をこえて大切にしていかなければならないものがある。

平成2年より施行されている幼稚園教育要領により、現在は環境を通しての保育と言うことで、従来のともすれば保育者主導で行なわれがちであった保育が幼児の自発活動を重視し、保育者は共にかかわりながら援助するという保育へと変容した。

今回、幼児をとりまく環境の変化や社会のニーズの多様化に対応して教育要領の改訂が行なわれ、各地で様々な研修会が開催されようとしている。この時に当たり、私は現行のものがどう変わるか、何が加えられるかということよりも、現行の教育要領が現場で実践されるに当たり、ともすればことばが一人歩きして、幼児の主体性、個の尊重ということにおいて、集団での行動や保育者の指導をしないことが新しい保育のあり方であるかのような誤解が生じたことを、くり返してはならないと思う。

その一つに保育者の役割の見直しがあげられる。私は様々な保育の事例を通して次のことを提言したい。

・保育者のあり方を考える

保育者を環境の一つとしての位置付けだけではなく主体的な保育の機能者として考える。

・今保育者に必要なもの

子どもの心のさけびにゆったりと耳を傾ける心のゆとり、身体のゆとり、時間のゆとり。家庭と同じぬくもりで守られている幸せを感じ合う。一人の使命感だけでなく、チームで支え合い考え合う。

・保育者として伝えたいもの

保育者であると共に主体的な子どもとの共同生活者として、人間として生きていくための基本的な生活行動生活文化、言語の大人モデルとしての伝統を大切にする。

(話題提供者 松隈玲子)

実際保育をする立場から

幼児は社会情勢、家庭環境、時代の変遷の影響で、年毎に発達状況は変遷している。保育者はやはりその発達状況と幼児の生活状態に対して適切な指導が必要となってくるのは当然である。

教育要領と同様に幼児が自ら考え、吸収して判

断し行動するように、人間としての育成をするのが保育者の原点であることは言うまでもない。

幼児の全生活である”あそび”を十分させる事により、幼児はその生活の中で自分を十分に出し、友達との関係の中で、自ら幼児自身の能力のすべてを使って伸張し、それぞれの自分の持てる能力を使えるようになり、保育者との毎日の生活の中で、保育者がどうかかわっていくかと言うことで、目的が達成できることになる。このことは現在の幼児教育として考えるべき時にきている。変化した幼児に対し、旧態依然の教育をしている事は保育者の役割を果たしたことにはならないだろう。

保育者が先に立ち、幼児を引っ張ってゆく指導でないため、そこには保育者の全神経、全能力を使い、頭で考え、この肉体も働かせて全身全霊で幼児にぶつかっていかねばならず、その事が大切になってくる。今までのようにこの目で見えるところに幼児の指導があるのではなく、幼児とかかわりつつ、観察しつつ、保育者が必要必要に応じて幼児に対応し、幼児の表面の要求でなく、幼児の内面からの要求や、幼児の変化に対して一つ一つ細かい細かい指導が必要である。個人個人皆違うので、それぞれその人に必要で、且つ違っている所を、機会をとらえて受けとめながら指導しなければならない。幼児自ら考えた事、精神的な事、能力的な事、そして生活習慣を指導する事が、現代幼児に対する保育者の役割として、保育者は努力し考え、神経を働かせ、肉体も使い、実践してゆかねばならないのではないだろうか。(話題提供者 堀合文子)

保育者に学ぶ

保育者は子どもと共に生活しながら、ひとりひとりの子どもが、今、あらわしていることを受け取り、一瞬のうちに判断して行動する。保育後、保育者は保育場面でおこったことについて考え続け、研究し、日々新たに子どもと出会っていく。

保育者から保育場面のありのままの様子や、保育者が日々感じていること、考えていることを学ぶのは、保育について考える楽しみと勇気を与えられる。

保育者は実践者であり、研究者である。

保育について、言葉や文字にあらわせるのは、保育場面で展開していることがらのほんの一部分である。保育場面に立ち戻って考えることを大切にしたいと思う。

保育者に学び、保育者自身の研究に学びながら、保育者の役割について考えていきたい。

(話題提供者 磯部景子)